

詩風録 第4集

退職記念日

皆岡 樹史

目次

まえがき	
サラリーマン哀歌	3
退職記念日	
雨の思い出	7
雨を見ながら	8
一身上の都合で退職した日	9
行ってきます	10
意欲	11
印象	12
お昼どうしよう	13
頑張るしかない	14
聞いた話と違う	15
休日	16
今日の占い	17
決心	18
心の中を	19
社会に出た日	20
出世自慢	21
しわがれた声	22
スランプ	24
狭き門	25
戦犯	26
それは天職なんですよ	27
退職記念日	28
旅立ち	29
遅刻の女王	30
どういう教育を受けているんだ	32
毒を吐く	34
何でぼくは妥協するんだろう	35
早帰り	36
勉強会	37

ぼくの歌	38
負けられん	39
負けん気	40
矛盾	41
迷言を吐く男	43
面接	45
辞めてもらってけっこうです	46
履歴書 DQ405 号	48
笑って家に帰ろう	49
悪者	50
奥付	53

まえがき

サラリーマン哀歌

社長、部長、お偉いさんを示すとき、
親指立てる癖が哀しい

朝がまたくるかと思うとイヤになる
明日は何の会議だろうか

それほどに難しくない言葉でも、
彼らが使うとややこしくなる

申告書の、いつもつまづく趣味の欄
読書は趣味でいいのだろうか

彼を見て、孔子の言葉を思い出す
巧言令色、すくなきかな仁

洒落っ気も、年とともに薄れゆく
靴下五足で、五百円也

明日こそ、辞表を叩きつけてやる
そのブランドも憎き男に

この一年、送別会のみ多かりき
同僚・同期、十人は辞め

クドクドとほざくキャリアウーマンの
時々変わる、口紅の色

気がつけば、霊と波長が合っている
今日も疲れが金縛りを呼ぶ

こんな日がいつまで続くのだろうか
空を見上げて、終電を待つ

耳目良し、煙草一箱、酒二合
持病はいつもストレスと書く

「こういうことが流行っているからこうしよう！」
そういうことが間違っているんだ

出張時、新幹線の改札で、
定期券見せて、呼び止められる

「健康にいい運動をやっているよ」
だけどこいつは、間食している

「謙虚に人の意見を聞け」と言って、
鬱憤晴らしをする上司

昨年もいいことなんかなかったと、
こぼしながらも初詣に行く

退職記念日

雨の思い出

.....

川が決壊したとかでみんな歩いてるんですよ。
もう胸まで水に浸かっててね。
それを見ながら、
ああまでして会社に行く必要があるんかいな、
なんて思っていましたよ。
どうせ行ったって仕事になんかなりゃせんのですからね。
第一外回りが出来ない。
電車もバスはストップしているわけだし、
車を使おうにも各地で通行止めになっているでしょ。
仮に出来たにしても、
取引先が営業してるかどうかもわからない。

ああいう時はね、
会社が臨時休業してやらんとならんのですよ。
そんな日に数字なんか取れるはずがないんだし、
そう考えるほうがおかしいですからね。
いくら社員の自主性に任してるって、
行動の一つ一つが査定なわけですから、
嫌でも出てくるですよ。
ほんとかわいそうですわ。

.....

雨を見ながら

みんなどうしているのだろうか？

やっぱりこんな雨を見ながら

呼吸をしているのだろうか？

家庭という言葉に安らぎをみるのだろうか？

幸せという言葉にいくつ出会ったのだろうか？

犠牲という言葉に潰されてはいないだろうか？

社会という言葉に振り回されてはいないだろうか？

仕事という言葉にごまかされてはいないだろうか？

疲れという言葉に甘えてはいないだろうか？

時間という言葉にいらだってははいないだろうか？

過去という言葉に逃げてはいないだろうか？

現在という言葉に今を感じるのだろうか？

未来という言葉に今日を投影できるのだろうか？

夢という言葉に目を向けることはあるのだろうか？

情熱という言葉を使ったのはいつのことだったのだろうか？

笑いという言葉に卑屈になっているのではないだろうか？

人生という言葉を避けてはいないだろうか？

みんなどうしているのだろうか？

こんな雨を見ながら…

一身上の都合で退職した日

行きつけの食堂で並んでいると
ライバル会社の人間が割り込んできたので
注意すると、奴ら逆ギレしやがって
こちらに文句つけてきた。
一瞬険悪なムードになったが、先輩から
「あの会社には昔からそういう輩が多いので
相手にするな。馬鹿を見るのはこっちだから」
と念を押されていたし、
ぼくはその日が最後だったので
突っ込むようなことはしなかったが
ただその場だけは譲らなかった。

取引先に行くと、以前貼ったポスターや
当時の販促物がそのままになっていたので
新しいものと交換した。
その作業をやっている途中、学生がやってきて、
「こんちはー」とぼくに挨拶した。
どうもぼくを業界の人と勘違いしているようだ。
だけどこちらもそれを正すことはせず
そのつど「おう、頑張っているな」
などと業界人ぶった挨拶を返していた。
二十年以上も前の話だ。あの時の学生も
もういいおじさんになっているだろう。

行ってきます

メタボなお腹をポコポコと
叩きながら目を覚ます。
寝癖の付いた髪からポロポロと
粉雪のようなフケが出る
あくびのついでにハアハアと
お口の臭いを確かめる
寝疲れした首をコリコリと
つまみながらトイレに向かう
おならの音がプープーと
昨日と違う音色を楽しむ

そんな情けない朝を迎える男も
それからおよそ一時間のち
ネクタイ締めてスーツを着れば
いっばしのビジネスマンに変身する
それではみなさん行ってきます

意欲

意欲なんて持たないほうがいい。
意欲を持って事に当たろうとすると、
いい仕事をしてやろうなどという
余計な我が入ってしまうから、
いい仕事が出来なくなってしまう。
たとえば文学とか音楽とかがいい例で、
意欲作などというふれこみの作品ほど
つまらないものが多く、
逆に気負いのない無欲な作品にこそ
いいものが多い。
ところが文学とか音楽なら
そのへんの呼吸がわかるくせに、
いざ仕事になると
わからなくなってしまう人が
多くいるから困ったもので、
そういう人が社会をよくしてやろうと
意欲的に取り組むものだから、
世の中おかしくなってくる。
意欲に感化された人や、
意欲にウンザリした人が、
意欲に振り回されたあげくに、
仕事の質を落としてしまう。
この国にある落ち着きのなさも、
何かしっくり来ないシステムも、
おそらくそこからきているのだろう。
確かにいい作品ではない。

印象

たとえば深夜、
街が寝静まっている時に、
一匹の猫の子が鳴いたとしましょう。
これが妙に響くんです。
昼間、喧噪の中で重大な事件があったとしても、
人にはその声の方が、
一日の印象として残るものなんです。

仕事でも同じことでしてね。
会議が行き詰まって誰も発言が出なくなった時に、
意見を吐く人がいたとしましょう。
そういう意見はだいたいがくだらん意見だったり、
すでに誰かが発言した意見だったりするわけですが、
人々の印象にはその人の意見が残るんです。
いや、その人が残るんです。
結局そういう人が勝ち組になっていくんですね。

出世なんて簡単なことなんですよ。
組織は目立って何ぼのもんだから、
馬鹿でも印象に残ればいだけなんです。
それを評価する上司の人だって、
目立って何ぼでやってきた人だから、
「おっ、おれの若い頃に似ている」
なんていうことになって、
結局は好結果となるわけなんです。

お昼どうしよう

コンビニ弁当はうまくないし
弁当屋のは油が多そうだし
カップラーメンはのどが渇くし
外食だと高くつくし
手弁当は作ってくれないし
自分で作る甲斐性もないし
パンだと腹一杯にならないし
バナナだけじゃ持たないし
お菓子だけだと飽きてくるし
マンナンだけじゃ味気ないし
水だけだとすぐに腹がへるし
かといって
抜くわけにもいかないし
さて、お昼どうしよう

頑張るしかない

この仕事を始めたら
頑張るしかない

その山を目指したら
頑張るしかない

一度歩き始めたから
頑張るしかない

一旦呼吸を始めたから
頑張るしかない

頑張るのはきついけど
頑張るしかない

頑張るは捨てられないから
頑張るしかない

生きているんだから
頑張るしかない

生きるためなんだから
頑張るしかない

とにもかくにも
頑張るしかない

聞いた話と違う

何度も転職をしている人の口癖の一つに「聞いた話と違う」というのがあります。どんな話で会社に入ってきて、それが現実とどう食い違っているのかは知らないのですが、『せっかくヤル気が入ってきたのに全然話が違う。自分は騙されたのだ。こういう場所では勤まらない』きっと、本人はこう思っているのでしょうか。

でもね、『聞いた話と違う』は実は口実にすぎないわけなのです。「会社を辞めるのは他人のせいだ。自分は逃げているわけではない」彼はそう思わせたいだけなのです。そういう人は次もきっと同じことを言う、次の次もそしてその次も同じことを言う。そういうものなのです。

休日

若い頃の休日といえば
一日中寝ていたものだ。
朝が早く夜が遅い仕事で
毎日が寝不足だったため
その寝不足を取り返そうと
必死に布団にしがみつく。
二連休であれば二日とも
三連休であれば三日とも
旅行先でもそうだった
観光以外は布団の中だ。
親戚宅でもそうだった
食事以外は布団の中だ。
寝疲れだとか気にせずに
必死に寝ていたものだった。

今日の占い

毎朝8時5分に家を出る私にとって
毎朝7時58分から始まる今日の占いは
気忙しくて、鬱陶しくて、気が重い。

これで最下位にでもなろうものなら
それが一日の重しとなって
最悪な一日になり果てる。

だから耳を塞いで、歌などうたって
聞かないようにしているんだけど
なぜか手の隙間から耳の中に入ってくる。

チャンネルを変えることも考えた。
だけど長年見慣れた番組の方が
しっくり来るので、ついかけている。

毎朝8時5分に家を出る私にとって
毎朝7時58分から始まる今日の占いは
毎朝のことだけど、鬱陶しくて、気が重い。

決心

あなたの収入を減らしますと
雇い主から言われたのです。
ただでさえ厳しい状況なのに
これ以上減らされてはたまらない。
それならいっその会社を
辞める手続きを取ってしまおうか、
そして次の場面に進もうか、
と本気で思った次第でありまして。
わたくし全身全霊を傾けまして
次の風が吹いてくるのをひたすら
待ち続けていたのであります。
ところが今は次の場面の風どころか
辞める風すらが吹いてこないのです。
辞めるイメージも浮かびませんし。

もしかしたら今は辞職しない
流れになっているのかもしれない。
それはもう少し頑張りなさいという
神のお告げなのかもしれない。
ということで今回、会社を辞めない
決心をしたのであります。

心の中を

いつもいつも考えることは
暮らしのことばかり
日々が通り抜けていく
風は吹く、心の中を

いつもいつも同じことの
繰り返しばかり
日々が色褪せていく
時は行く、心の中を

ただ夢だけが
駆け抜けていくのを
遠く眺めてるような毎日
風は吹く、心の中を

ああ、思い出だけを
数えすぎた日々
冷たい日差しの中で
時は行く、心の中を

いつもいつも置き忘れた夢
追い求める日々
日々が閉ざされていく
風は吹く、心の中を

社会に出た日

初めて社会に出た日のことだった。

先輩社員が取引先に電話をかけていた。

ところが、取引先が出なかったらしく

受話器を置いた。と同時に彼は大きな声で

「電話に出んわ」と言った。

すると周囲は堰を切ったように

笑い出した。

『えっ、何でみんな笑うんだ？

いったいどこがおかしいんだ？』

学生の頃、クラスの笑いを取るために

必死になってギャグを考え

最終的に『以心伝心ギャグ』という

一種の境地にたどり着いたぼくにとって

言い古されたダジャレに対する

みんなの笑いは不可解だった。

しかもそのくだらんダジャレを言ったのが

ぼくとさほど年が変わらない人間だったから

気が重くなった。

『これから、このレベルの中で

生活していかなければならないのか』

結局ぼくはその職場になじめなかった。

出世自慢

……そうそう、出世といえばこの間
昔の友だちに会ったんだけどね
そいつ何かにつけて
今の自分の地位だとか
年収だとかを自慢するんだよ。
最初は聞き流していたんだけど
最後には「お前もうちに来れば
よかったのに。そうしたらそんなに
頭が白くなってなかったと思うぞ」
なんて言い出してね。
それでぼくは言ってやったんだ。
「成功してよかったね。
だけどおれはその仕事を
しなくてよかったと思うよ」
「なんで？」とそいつが聞くので
「だっておれの仕事は
髪の毛が白くなるだけだけど
お前の仕事は髪の毛が
減っていくみたいだからね」
そいつ、それを聞いて
変な顔して笑っていたな……

しわがれた声

就職活動をしていた頃の話だ。
電車の中でウトウトしていると
どこからともなく聞き覚えのある
しわがれた声が聞こえてきた。
「兄ちゃんよ、その道は駄目だ。
そのまま行くと生き急ぎになるぜ」
なぜかこの言葉が気にかかった。
その後ある企業に就職したのだが
本当に生き急いでいる状態に陥り
管理職についていたものの
未練なくキッパリ辞めてしまった。

それから半年ほど休んだのち
別の企業に勤めるようになった。
すると再びあの声が聞こえたのだ。
「兄ちゃんよ。その道も駄目だ。
先がまったく見えないぜ」
前のことがあったので
『きっとこれは天の声だ』
と思った。だけど決まったばかりの
仕事を簡単に辞めるわけにはいかない。
そこで十数年過ごしたのだったが
なんとぼくの居場所がなくなった。

いよいよ働く場所がなくなってきた。
企業はもう駄目だと諦め、本当に
先の見えない仕事をぼくは始めた。
その時だ。またまたあの声が聞こえた。
「兄ちゃんよ、その道は正解だ。
その道はあんたそのものだ」
しわがれた声がそう語りかけた。
あれから数年経っている。そろそろ

その結果が見える頃だ。

スランプ

ちょっとばかりその気になれなくて
そのままズルズルと行ってしまうことがある。
とりあえずノルマなんか考えているもんだから
「何やってるんだ。このままじゃだめだ」
と急に焦りを感じだす。
焦りは力みを生み出して、
力むとうまくいかなくなる。
そして深みにはまってくると
人生までも恨むに到り、
ついついこの言葉を吐いてしまう。
「おれの人生はスランプなんだ」
すると心はスランプという言葉に引っかかり、
結局本当にスランプになって、
何年もそこから抜け出せない。
いったい自分に何を期待しているんだ。
何も考えずにやっていけば、
何も問題なかったのにね。

狭き門

その会社の採用基準は
強力な縁故の有無と、
溢れるばかりのセクシーさだ。
学歴や実力は参考程度で、
仮にそれゆえに内定していても、
最終的には取り消される。
だからこそその会社は、
狭き門と呼ばれるんだ。
裏金遣っても同じこと。
何度受けても同じこと。
富や自信を失うだけで、
おまえには何の得もない。
だからその会社はやめておけ。
悪いこと言わんからやめておけ。
その会社の採用基準は、
強力な縁故の有無と、
溢れるばかりのセクシーさなんだから・・・。

戦犯

以前勤めていた会社は
遅くまで仕事をするのが
美德だと思っているようなところで、
みな意味もなく人件費と光熱費の
無駄遣いをやっていた。
定時は午後7時だったのだが、
午後9時10時帰りはざらで、
酷い時には11時12時に会社を出ていた。
おかげでその時代にやっていた
プロ野球ニュースより前の時間帯の
テレビ番組をぼくらは知らない。
それではいかんと始まったのが
早帰り運動だった。
週に一度早帰りの日を決めて、
その日は何があろうとも
定時に帰るというものだった。
ところが早帰りの意味を理解できない
ひとりの馬鹿な上司がいて、
「今日の予算も行ってないのに
何が早帰りだ」などと言い出した。
おかげで誰もが帰りづらくなり、
結局週一度の早帰りの日は、
残業をつけない日と成り果てた。
会社は人件費は浮かせたものの、
光熱費は前よりも酷くなった。
その後その馬鹿な上司は
経費削減を叫ぶようになるのだが、
そいつが叫んでも何の説得力もなく、
あげくに会社は潰れてしまった。

それは天職なんですよ

何が楽しいというのではなく
楽しくない場面がなぜか少ない。
だから長丁場でも堪えられるのだ。

不思議なことにそれをやっていると
何度もいい運に巡り会う。どんな
修羅場でも不思議と救いの主が現れる。

仮にそれを辞めたとしても
回り回ってまた同じことをやるだろう。
そういう時なぜか力が増しているものだ。

同じことをやると言っても
それは決して腐れ縁なんかではない。
本能がそれを好んでいるのだ。

だからいい自分をイメージできるし
だから他人にもやさしくなれる。
つまりはそれがいい運を運んでくるのだ。

不器用などという言葉で片付けてはならない。
それしか出来ないからやっているのではない。
それが天職だからやっているのだ。

退職記念日

確かに何かやりたかったのだけど、
確かに嫌になっていたのだけど、
本音のところは
何も考えられなくなったからだ。
突然そうなったのではなく、
突然そう思ったのではなく、
十年と数ヶ月がその方向に歩かせたのだ。
人生がヤル気という人為を嫌ったのだ。
いろいろな事件があった。
いろいろな思考もあった。
だけどそれがいつだったかは忘れたし、
体系付けて思い出すことも出来ない。
今日はそんな日だ。
いつも一線上にない思考、
星のようにまばらな思い出、
まるで幼児期を思い出すように
あいまいな過去を振り返ってみる。

旅立ち

—とうとう終わりましたね
—この時代の話ですか
—ええ、この時代の話です
—それなら終わりましたね
—お疲れ様でした
—いやいや、現世はこれからですよ

—夢が少し遠のきましたね
—いや、逆に近づいた気がします
—風当たりはどうなんですか
—悪くはないと思いますよ
—それはよかった
—というか、存在感がなかった

—それはないでしょう
—それはありましたよ
—そんなもんですかねえ
—ええ、ヒシヒシと感じていました
—そうは思えなかったけど
—実際、身分が不安定だったしね

—えっ、身分って何ですか
—実は表に出られなかったんですよ
—なるほど、それは辛い
—名前すら示せなかったし
—名刺はもらいましたけど……
—実はその名前、存在しないんですよ

遅刻の女王

学生の頃、何度も遅刻していたから、
人のことをとやかくは言えないが、
会社勤めをしていた頃の
部下の遅刻には往生しましたわい。
別に悪意を持って遅刻しているのではない。
ちょっと変わった女子ではあるが、
遅刻が悪いことはわかっているし、
根が素直なので、
注意すれば翌日は遅刻せずにやってくる。
とはいえ、やってくる時間がとてつもなく早い。
九時半に来ればいいのに、
何と七時半だ。

おかしいなと思って聞いてみた。
「家から会社まで何時間かかるんか？」
「一時間くらい」
「じゃあ九時半に会社に着くには、
何時に家を出たらいいかわかるやろ？」
「うん、六時半」
間違っははない。だけど常識ではない。

この問答で、ぼくはあることがわかった。
彼女は算数が苦手だったのだ。
つまり計算問題が解けないのだ。
そこで「渋滞することも頭に入れて、
八時くらいに家を出たほうがいいんじゃないか？」
とアドバイスをした。
何で八時なのかはわからなかったようだが、
彼女は素直にそれを聞き入れた。
それで何とか九時半出社の遅刻は減った。
ところが早朝会議の時だとか、
時差出勤の時はまたしても遅刻するのだ。

理由は同じで算数が苦手だからだ。
つまり応用問題が解けないのだ。

おそらく彼女は一生遅刻するだろう。
それがわかったぼくは
もう何も言いたくなかったが、
立场上言わなくてはならない。
ということで、遅刻してない日に
「その調子だ。頑張れ」と言うことにした。
だが、そう言うと翌日必ず彼女は遅刻した。
その理由がふるっていた。
「頑張れと言われたので、頑張って寝た」
つまり頑張りすぎて寝過ぎたのだ。

どういう教育を受けているんだ

「誰のおかげで飯が食えると思っとるんだ!？」
かつてぼくは、ある大手企業子会社の
販売部門で働いていたのだが、
そこでよく聞かされた言葉だ。
誰がそういうことを言うのかというと、
親会社の社員さまたちだ。
何かといえば子会社の人間を蔑んで、
初対面から「お前」呼ばわりした上で
無理難題を突きつけてくる。
世間知らずの兄ちゃんたちならともかくも、
いちおう肩書きの付いた人たちがやるから
しゃれにならない。
気に入らないことがあると、
「どういう教育をしているんだ」と
当本社にクレームをつけてくる。
おかげでこちらは本社から、
長いものには巻かれろ的な
教育を受ける羽目になる。
そうなると面倒なので、
誰も奴らに逆らわなくなる、
すると奴らは調子に乗って
ますます態度がでかくなる。
横柄に値引きの強要をしてきては、
「この会社の社長は何々君だったな」と、
いかにも社長の知り合いのように振る舞って、
自分の意に従わせようとする。
従わないともちろん本社にクレームだ。
あげくの果てに奴らの口から出た言葉が、
「誰のおかげで飯が食えると思っとるんだ!？」
少なくとも無理難題を突きつけてくる、
偉そうなお前たちのおかげではない。
いったいどういう教育を受けているんだ、

鉄頭のおっさんたちよ。

毒を吐く

今日この頃は二十度を超え、
半袖の人も増えている。
すでに初夏に入っているんだ。
さすがにこれはないだろう、
と思っていたら、まだいるんだな
ブーツ姿の女の子。
「アーアツクルシイ。
アノアシゼッタタイムレテルゾ…」
思わずぼくが口走る。
「アナタモケッコウドクハキマスネ」
関連会社の人が言う。
いやいや毒を吐いているのは
ぼくらの風上に立っている
ブーツの中の蒸れた足だよ。

何でぼくは妥協するんだろう

何でぼくは妥協するんだろうか。
これまでの人生でこんなことは
一度もなかったじゃないか。
ここは妥協する場面じゃなくて
突っぱねる場面だったじゃないか。
笑顔で受ける場面じゃなくて
真顔で受ける場面だったじゃないか。
円熟だって？ 老成だって？ 諦観だって？
そういうことからほど遠い世界で
ぼくは生きてきたじゃないか。
何でここで妥協するんだろうか。
何であいつに笑顔でいるんだろうか。
これからもずっとそうなんだろうか。

早帰り

ふと生活に変化を付けようと思い立ち、
今日は仕事を三十分早く終え、
急いで家に帰ってきたのだが、
野暮用で時間を費やしてしまい、
結局風呂に入る時間はいつもと同じで、
まったく新鮮味のない夜を迎えている。

しかし考えてみれば、
たかだか三十分早く帰ったくらいで、
どんなすばらしい世界が待っているというのだ。
所詮はいつもの生活の上に、
ちょっと時間が乗っかっただけの話で、
別にその時間に特別な楽しみが
用意されているわけではないのだ。

今夜みたいに、
時間にふられて損した気分になるくらいなら、
ありもしない「特別な時間」なんか期待せずに、
その生活の中に楽しみを見いだすほうが、
よっぽどいいわい。

勉強会

勉強会に集まる人の大部分が
ハゲ、シラガ、メタボだ。
若い人もいることはいる。
だけど周りからは同一視され
『大部分』の中に数えられている。
もちろん本人たちは
ハゲ、シラガ、メタボを
否定し、若さを強調する。
ところがこういう勉強会の本質が
実は同化教育なもんだから
同一視はどうにも避けようがない。
そして彼らは知らないうちに
ハゲ、シラガ、メタボに
同化されていく。
さらには近い将来、
後輩にも同じ勉強をさせて
同化させることになる。

ぼくの歌

十数年ほど前に、当時上司だった人と
初めて飲みに行った時の話だ。
何の歌だったか、ぼくがカラオケで
歌をうたっていると
「ぼくの歌を取ったらいかんだろう。
それはぼくが先輩からもらった歌だ」
と彼は憤慨して文句を言った。
『ぼくの歌』って…、初めて
飲みに行った人の十八番なんて
ぼくが知っているはずがない。
そんなに大切な歌なら、先に
うたっておけばいい話で、そうすれば
ぼくも同じ歌なんかうたわない。

その文句で充分白けさせられたのだが
彼はさらにぼくを白けさせてくれた。
文句を言ってから十分後、彼は
「君はこういう歌を知っとるかね。
これはぼくが先輩からもらった歌だ」
と、ろれつの回らない口で言い
ぼくがうたった歌をうたい出した。
最初は皮肉でうたっているのかと
思ったのだが、その酔い方からして
どうも記憶が飛んでいる様子だった。

ま、それはともかく、とても『ぼくの歌』
と呼べるような歌にはなってなかった。
それはそれは下手くそだったのだ。
それ以降ぼくは、彼と二人で
飲みに行くことはしなかった。

負けられん

ここまで来て思う。
負けられん。
絶対に負けられん。
何があっても
何が襲ってきても
負けられんもんは
負けられん。
不埒な心は追い出してやる。
優柔不断はぶち壊してやる。
負けられんたい。
絶対、負けられんたい。

負けん気

小学生の頃までは人と競争することなんて、
まったく興味がなかった。
ただただその日が面白ければ、
それでよかった。
かけっこで負けたって、
ヒットが打てなくたって、
悔しいなどとは少しも思わず、
それをどう笑い話に持って行こうか…
なんて考えている変な少年だった。
ところが青春という時期に入ると、
なぜか人目を気にするようになり、
それが負けん気につながった。
勝手に人をライバル視しては、
「こいつには負けたくない」
なんて思うようになったのだ。
成長ホルモンでも関係していたのだろうか、
とにかく人に負けるのが、
いや、イヤ、嫌なのだ。
それゆえ意地を張るようにもなった。
「こいつらと同じ運命を歩いて行けるか」と、
一人孤独を装ったり、
意味なく部活を辞めたり、だ。
果ては同じような理由で会社を辞めて、
今なお続く波瀾万丈に繋がっていく。

ああ、ぼくのおかしな人生は、
青春時代から始まっているのだ。

矛盾

ぼくはどちらかという物事を
コツコツとやることの方が好きだ。
昔会社でよくDMの封入作業をやっていたのだが
その際、多くの人たちはそこにを入れるチラシを
十枚ほどまとめて折り畳んでいた。
だけどぼくら一部の人間は
それを好まなかった。
それをやってしまうと仕事に
気持ちがこもらないように思えたのだ。

そこで一枚一枚を丁寧かつ迅速に
折り畳むことを心がけて作業した。確かに
要領よくやれば作業は速く進むと思われる。
ところが不思議なことに
そうなることはめったになかった。
終わってみると同じ量を同じ時間に
やり終わったのだ。
時にはこちらの方が
早く終わることだってあった。

理由は簡単で、
相手は適当に折っているものだから
封入する時に入りにくくなり
時間を食ってしまったわけだ。
逆にこちらは丁寧に折っているから
封入がすごく楽だった。
しかも彼らは初っぱなから
手を抜いてやっているわけだから
すべてがダラダラと進行するのだ。

さて、ぼくたちはコツコツやったことで
仕事をやり遂げた充実感を味わえて

そのことで気分が爽快になることを
知ることが出来た。これが現在
人生において貴重な財産となっている。

ところでその会社は、コツコツ組が
辞めたあとに潰れてしまった。
残ったダラダラ組がどうなったかという
実はその要領の良さで親会社に拾われ
今はいい暮らしをしているという。

迷言を吐く男

三十代の前半だったか、足繁く
飲み屋に通った時期がある。
思い起こせば不機嫌な生活を
強いられた時期だった。
とにかく毎日がうつむき加減で
首や肩のこる毎日だった。

足繁く飲み屋に通ったのは、そんな
不機嫌で肩や首のこる生活から
少しの時間でも逃げ出したいという
一心からだった。

飲むとぼくはいつも饒舌になった。
顔見知りの人、初対面の人、
そんなこと関係なく、とにかく
酔いの中に人を見つけると
ぼくは大いにしゃべり続けた。
その饒舌に乗せられて、数々の
迷言が口から滑り出たものだった。

そんな迷言の中の一つに
「青春とはインキンの痒みである」
というのがあった。
どういう経緯からその言葉が
出たのかは憶えてないが。
これが受けに受けたのだった。
その辺にいたおっさんたちが口々に
「その通り！」と賛同する。

きっとその時そこにいた人たちは
ぼくと同じく、不潔で臭く
痒く痒くしつこく痒く、また痒く

掻きすぎて痛く、痛くて痒く..
地獄のような青春を送ってきた
優しい男たちだったのだろう。

面接

懲りない人は今日も面接に向かう。
しゃべりすぎを注意しながら、
今日もまたしゃべりすぎてしまった。
体面を繕ってはみるが、
いつの間にか乗せられてしまう。
頼りない人が露わになる。
悲しいかな今日も馬鹿をやっている。
馬鹿をやりながら馬鹿を否定している。
結局は馬鹿だ。
悔やむまいと思いつつながら、
いつの間にか悔やんでしまう。
そんな毎日。
明日も面接に向かう。

辞めてもらってけっこうです

若い頃、ある上司がよく使っていた言葉に
「こういうことも出来ない人は
辞めてもらってけっこうです」
というのがある。この言葉を真に受けて
「では辞めます」と答えた人が何人かいた。
上司は慌てて引き止めに入ったものだった。

士気を鼓舞するためにというのは
若い頃にもわかったのだが、
何で「辞めてもらってけっこう」
などという言葉が安易に吐いたのだろう。
当時もそうだったのだから、今時そんな言葉を
口にすれば、きっと大きな問題になるはずだ。

確かに笛吹けど踊らずの人たちを
相手にすればそう言いたくなるのもわかる。
だが、そういう言葉を吐く上司には
『こう言っても辞めるヤツなんていない。
現におれたちだって辞めなかったし』
という考えが頭の中にあったのだろう。

その上司が若い頃なら、
そういう言葉も通用しただろうが
『新人類』なる言葉が流行っていた時代、
世の中は確実に変わっていたのだ。
そういう世の中の変化をその上司は
気づいていなかったに違いない。

さてその後、そういう出来事があったにも関わらず
その上司は相変わらず同じことを言っていた。
そして同じようなトラブルを起こしていた。
常に新しい体質を模索する企業にとって、

きっと彼のような時代を読めない人こそが
「辞めてもらってけっこう」な人だったはずだ。

履歴書 DQ405 号

投稿に明け暮れていた
若い日々がありました。
詩であるのか歌詞であるのか
よくわからない言葉を綴っては
それを送っていたのです。
そしていつも家に帰ると
まず最初にポストを開けたのです。
だけどいつも入っているのは
乱雑に放り込まれた新聞と
怪しげなチラシだけでありました。
いやいや、時にはその関連の
手紙が来ることもありましたよ。
しかしなぜかお金がかかるのです。
若いぼくには非現実的な額でした。
そんなこんなで徐々に熱も冷めていき
どこにでもあるような企業に収まって
今に到っているわけでございます。

笑って家に帰ろう

晴れた日はもちろん
笑って家に帰ろう。
雨に濡れたとしても
笑って家に帰ろう。

雪の中をこけたとしても
笑って家に帰ろう。
台風で動けなくなっても
笑って家に帰ろう。

試合に勝ったらもちろん
笑って家に帰ろう。
試合に負けたとしても
笑って家に帰ろう。

誰かとケンカをしても
笑って家に帰ろう。
上司に激しく罵られても
笑って家に帰ろう。

今日を幸せで終わるために
明日を幸せで始めるために
人生を幸せにするために
笑って家に帰ろう。

悪者

気がつけば、なんと私が一番の悪者になっているではないですか。いわゆる欠席裁判というやつですね。いや彼ら、私の前ではぬけぬけと「こちらが悪者になっておきましたので」などと言うのですが、企業なんですよ。利益にならないことをするはずがない。悪者のあとに『実は』を添えたのです。そして私が悪いように仕向けたのです。

今となっては弁解することが出来ないからあとは残った人たちの解釈に任せるしかない。だけどね、もう考えるのが面倒なんです。おそらくこれから私はあの人たちと二度と関わりを持たないで生きて行くでしょう。一方的に悪役にされるのは嫌ですが、とりあえず今回は一歩下がって客観的にこの案件を眺めることに致します。そしていつか笑い話にする所存でございます。

奥付

退職記念日

著者：皆岡樹史（みなおか たつし）

著者プロフィール：

- ・昭和 32 年 福岡県八幡市生まれ
- ・モットー：『人生万事大丈夫！』
- ・趣味：作詞、作曲、弾き語り。
- ・影響を受けた人：一遍、盤珪、高村光太郎、中原中也、ボブ・ディラン、吉田拓郎
- ・影響を受けた書物：「老子」「臨濟録」「日本靈異記」「徒然草」「延命十句観音経靈驗記」
- ・影響を受けたマンガ：「あしたのジョー」「人間交差点」「シュマリ」
- ・ブログ：[\[https://detan.club/\]](https://detan.club/)

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブクログ

退職記念日

著 皆岡 樹史

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
